

外部有識者のコメント

○事業の課題や問題点

・事業の効率性・効果性を高めるためには、事業内容ごとに、どのような効果が出ているのかを把握することが大事であるが、その把握がなされていない。また、最終アウトカムしか設定されておらず、適正な中間アウトカムの設定が必要である。

・既存のアウトカム指標は、この事業からの直接的な成果として、把握可能なものになっていない。「患者体験調査」での把握が必要かつ十分なものであるか、精査が必要である。

・就労と疾患の両立という観点からは年間3万件という件数は、年間のがん診断数が100万人近いことを踏まえれば、就労中のがん患者を分母にかぎっても、相談に至っている件数が低いのではないかと。

・実施事業が複数あるため、それぞれの実施事業の効果を明らかにする仕組みが必要。数ではなく、質に関わる指標を取る努力が必要。患者の視点に立った時に、満足度以外の指標がないかを検討する努力が求められる。

・最終的なアウトカム指標が設定されていることは望ましいが、本事業の直接的な影響に留まらない効果が反映してしまう遠いものになっている。より本事業の実態に即した中間アウトカムの指標を適切に設定する必要がある。

・本事業は、医療保険ではまかなえないことを行うところに意義がある。例えば、がんの相談支援やアピアランスケアなどである。治療費の高騰もあいまって、がんの治療をしながら働き続ける患者が増えているなかで、そうした支援に資する評価が必要ではないかと。

・アウトカム指標の設定が事業目的と比して遠いので、現状では適切にPDCAサイクルが回っているのか疑問が残る点が課題である。また、事業目的として医療従事者の養成が入っているが現状では十分に評価アウトカムに反映されていない。評価指標について全国レベルの指標の経年変化だけではそれ以上の検証に耐えるものにならないので、結局適切な評価指標とはいえないのではないかと。また、地域でのがん医療のアクセスの均てん化の観点から、地域や病院単位で比較可能なアウトカムの設定も求められている。

○改善の手法や事業見直しの方向性

・事業の前後や、事業の実施内容の差に着目し、事業の効果を、個別病院別や地域別に把握する調査が必要である。その結果に基づき、望ましい事業の在り方を検討することが大事である。

また、中間アウトカムにおいても、事業との関係が明確であるか、事業の工夫によって変化するアウトカムであるかに注意し、アウトカム指標を設定すべきである。また、アウトカムの絶対レベルの変化だけではなく、アウトカム指標の地域差に注目することも必要である。

・病院に対する「支援機能強化」の実態や、その病院ごとの差異が明確でない。ストラクチャー指標でもよいので、違いが可視化されることが、患者が治療拠点やサポート体制を選択するという観点では重要ではないかと。

・患者体験調査は、非定量的な指標を中心に調査しているという点では、一定の有用性はあるが、それらは、「全国がん登録」で登録されている情報ときちんと紐づいてこそ意味があるのではないかと。

・一定水準以上の医療が提供されている病院にアクセスする可能性が担保されていることを評価するのであれば、拠点病院への紹介症例数や物理的なアクセス時間などを指標として考慮しても良いのではないかと。

・がんの年齢調整死亡率という指標は、医療の進歩といった本事業とは関係のない点が影響するほか、上記であげた本事業で実施すべき点を評価しきれない指標となっているのではないか。

そうすると、相談支援や就労支援を評価する指標を設定していく必要がある。こうした新たな指標を作っていくためには、患者が治療以外で何を求めているのかといった点について、さらなる調査が必要なのではないか。

例えば、「相談支援センターを知っているか」という質問などに加えて、「アピアランスケアの相談が役立ったか」、「相談したことにより仕事の継続に役立ったか。」といった質問も事業の評価に資するのではないか。

・患者の体験については経年比較が難しいので、少なくとも都道府県別で推移を追えるような調査の利用を考える必要があるのではないか。また、評価指標については病院ごとに公表可能な相談件数などの資料を用いて、各病院が自院の位置を確認できる仕組みが必要ではないか。がん登録の再集計などを行えば、治療開始までの期間や症例数についても病院ごとに比較可能になるはずである。またがん患者を地域で支えることが必要となる点を踏まえて、地域連携（ネットワーク）にかかる取り組みを評価する指標を引き続き検討する必要がある。

○その他（特筆すべき事項）

・がんの「予防」「医療（治療）」「共生」の3つの対策が全体として好循環をもたらすことが必要であり、その観点からすると、成果目標（現状）の範囲は狭く、説得力という点でも十分とは言えない。

・本事業は、がん患者のために行われるものであること、質の高い医療を提供するためのものであること、そうした点についてしっかり目的として掲げられている点は、事業の目的として正しいと思われる。プロフェッションは100点満点はなく、常に向上していくことを意味するので、そうした医療従事者のおかれた立場に寄り添った施策の評価が重要だと思われる。

・医師・薬剤師・看護師などを対象とした研修など、がん診療連携拠点病院だからこそできることがあり、他の病院との連携をはかることをしっかり評価していく必要がある。また、コロナ禍で、在宅で治療する患者が増えたということを実地調査で伺った。生活の質をあげるためにも、在宅での治療を可能とする地域の病院や訪問看護ステーションとの連携といったことが重要となってくる。そうした拠点病院だからこそできる、他の機関とのアウトリーチを評価できるようにすると良いのではないか。